

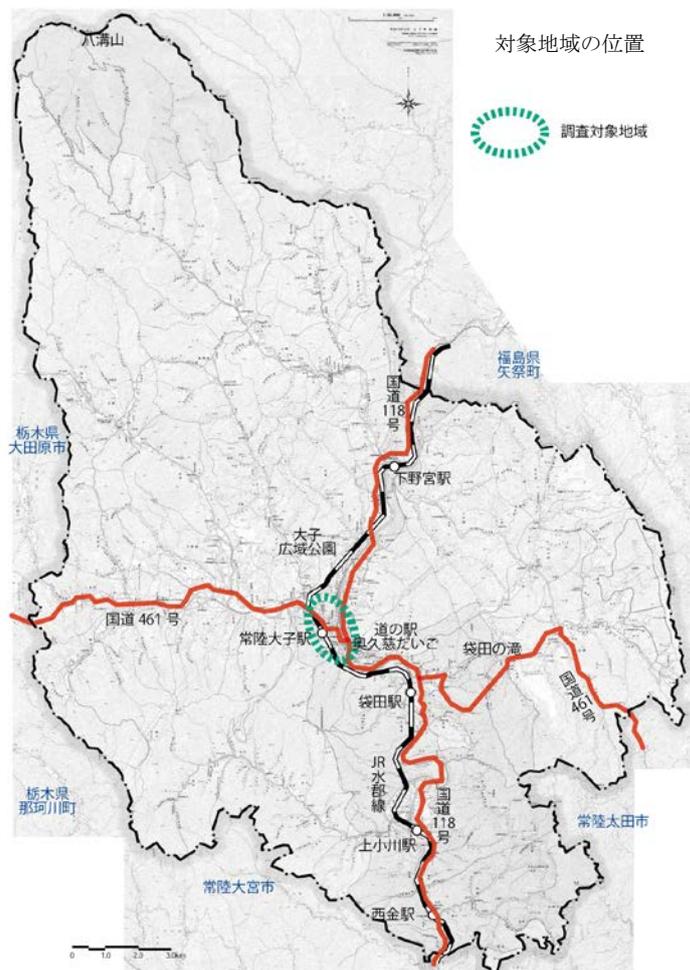
# 1 計画の策定にあたって

## 1-1 計画策定の趣旨

常陸大子駅周辺は、周囲を山地で囲まれるといった自然条件の下で、周辺の町村を取り込みながら物資の流通の中心地としての機能を果たし、主に商業機能やサービス機能を提供する中心市街地の役割を担ってきました。しかし、進学や職を求めての若者の流出や少子化などによって人口減少が顕著に現れ、中心市街地の活力が低下し、拠点性を失いつつあります。

一方、近年の太子町では、袋田の滝や温泉、特産品などの地場産業や様々な観光レクリエーション資源を活かし、交流人口の増加を図ることによる活力あるまちづくりに取り組んでいます。

このようなことから、中心市街地においては、地域住民の日常生活の利便性を確保する生活拠点の役割に、まちなか観光拠点の要素を加えることで、生活者と来訪者の交流から生まれる、まちなかの活性化を図るため、生活・観光・交流を柱としたまちづくりへの転換を目指し、中心市街地におけるまちづくりと、その核となる拠点の構想を策定するものです。



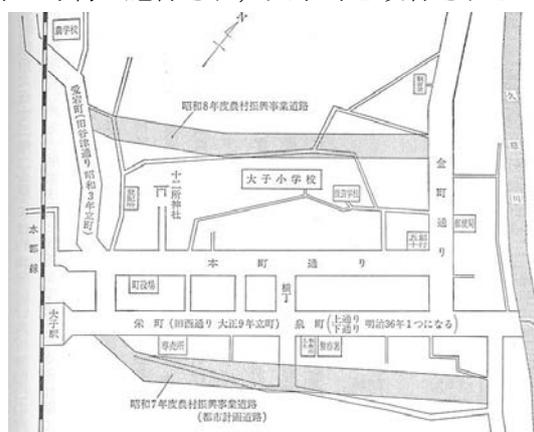
## 1-2 大子町のまちづくりの沿革

### 1. 大子町の誕生

大子町の中心市街地は、南北に貫流する久慈川と西方より流れる押川の合流する地にあり、四方に伸びる道路の分岐点に当ることもあって古くから交通・交易の中心をなし、宿場の要素を保ちながら、街道交通や<sup>か</sup>河岸業発達とともに物産の集散地として賑わってきました。

大子町の誕生は、明治22年4月1日に市町村制が施行され、同年6月30日、旧来の大子村、浅川村、上岡村、山田村の4村を合併して大子村が組織されたことに始まります。そして明治24年8月1日、大子村に町制が施行され、大子町と改称されました。

町制施行後から、大正、昭和初期にかけての大子町は、旧来の本町、金町、泉町を中心とした市街地から、水郡線の開通を機として泉町通りを延伸したことにより、常陸大子駅を中心として住宅街が広まりました。そして大正9年に栄町が立町、昭和3年には愛宕町が立町するなど、明治中期と比較して、人口・戸数とも二倍から三倍に増加しました。



昭和初期の大子町市街地図

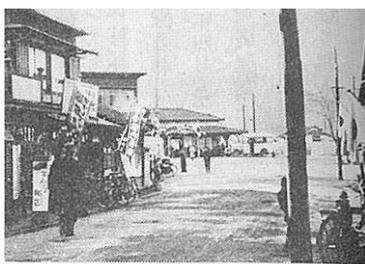
大子町の市街地が活気に溢れ、賑わいを見せていたのが大正から昭和初期にかけての時代であると言えます。



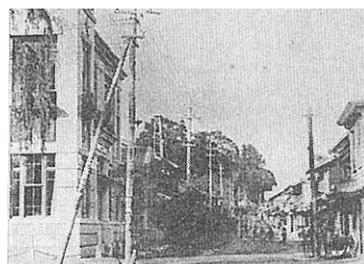
本町通り



泉町通り



栄町，大子駅付近



金町通り

	現住人口	現住戸数
明治21年	2 646	419
39年	4 094	
40年	4 158	
41年	4 248	
42年	4 333	
43年	4 433	
大正3年	4 554	847
13年	5 323	988
昭和4年	5 732	1 125
5年	6 306	1 200
6年	6 407	1 208
7年	6 510	1 210
8年	6 602	1 212
9年	6 932	1 416

大子町の人口及び戸数

## 2. 戦後復興期の天子町

### ①八溝林倉の復興

総面積の72%が山林である天子地方は、「八溝林倉」や「茨城県最大の林倉」と呼ばれるほど有数の林業地帯でした。昭和23年度の林産物生産額が総生産額の約4分の1を占めていたことからわかるように、当地方の人々にとって山林は、木材、木炭、薪などを生み出す重要な就業の場として位置していました。

しかし、林産物の資源にあっては、戦時中では軍需用材や生産拡充用材として、また戦後復興では仮設住宅用材や復興用材として需要が急増し、それに応じて森林伐採が進み、林倉と呼ばれた山林は7~8割がまる裸にされていました。そして荒廃した森林の復興は、戦後日本の復興にとって急務とされました。また、当時甚大な災害をもたらしたカスリン台風を体験し、災害の未然防止という観点からも治山治水の緊急必要性を認識した茨城県は、造林事業に取り掛かることとなります。

この戦後の森林復興によって、奥久慈の美しい自然や、豊かな水源が守られることになりました。



茨城県が配布した「造林のすすめ」

### ②祭りの復活

昭和20年、人々は敗戦という現実から、復興に向けて将来への不安が押し寄せる耐乏生活を送る日々でしたが、せめて沈みがちな心だけでも楽しませ慰めようと努力しました。その現われの一つが祭りでした。屋台や山車を引き廻し、太鼓や笛の音が響き渡ると近郷近在から人々が集まり、祭りの雰囲気もいやがうえにも盛り上がりを見せました。

祭りの復活は、戦後の復興に、人々の活力と喜びを与えることになりました。



祭りに曳きだされた山車

### ③甦る文化活動

また、その頃から文学活動も盛んになり、大子地方で刊行された文学誌の例として、昭和 28 年に郷土詩『奥久慈膝くりげ』（著者、石井良一）などが刊行されました。さらに昭和 30 年の町村合併を機に、新生大子町にふさわしい文学活動を目指そうと「大子文学会」が結成されました。大子文学会は当地方の文学愛好者を結集し、文学活動の先端に立とうとしたもので、結成同年に『大子文学』創刊号を発刊しました。

このような文学活動の活性化は、これからの時代に期待と希望の光りを照らすものとなりました。



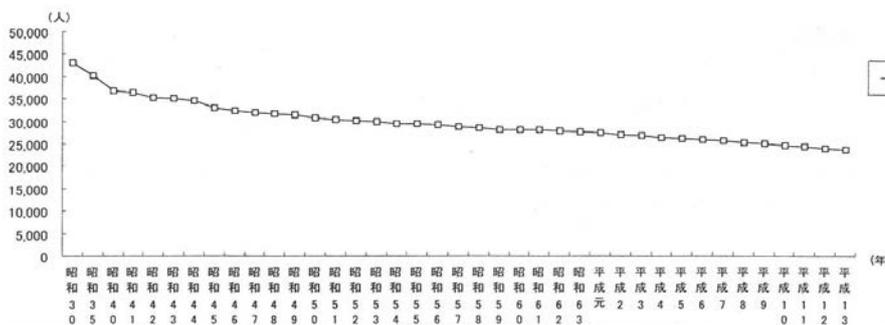
「奥久慈膝くりげ」昭和 28 年 「大子文学」昭和 30 年

## 3. 新生大子町のあゆみ

### ①新生大子町

昭和 30 年 3 月 31 日、大子、黒沢、佐原、生瀬、宮川、依上、袋田、上小川、下小川の 1 町 8 村が合併し、新生大子町が発足しました。町名については、旧大子町が文化・教育、交通の中心として、あるいは物資の集散地として位置し、またこの地方を大子地方と称していたことから、大子町の名を存続させることになりました。

そして高度経済成長の波を受けて、大子町にも多様な変化が生じました。まず人口の面から見ると、合併当時の町の人口 43,124 人をピークに、人口の減少と高齢化が始まることとなります。その理由の一つとして産業構造の変化から、高度成長期は特に農山村から都市部へ若者が続々と流出していったことが原因として挙げられます。



合併後の人口の推移

一方、大子町の就業構造においても例外なく変化が現れ、昭和 30 年には農林業を中心とする第 1 次産業が 7 割を占めていましたが、昭和 45 年になるとその比率は 5 割強まで低下しました。

	第 1 次産業	第 2 次産業	第 3 次産業	計
昭和 30 年	13 029 (68.9)	1 685 ( 8.9)	4 207 (22.2)	18 922 (100.0)
35 年	12 177 (65.1)	2 099 (11.2)	4 415 (23.6)	18 695 (100.0)
40 年	10 013 (59.4)	2 255 (13.4)	4 593 (27.2)	16 865 (100.0)
45 年	8 153 (50.7)	3 128 (19.4)	4 816 (29.9)	16 097 (100.0)

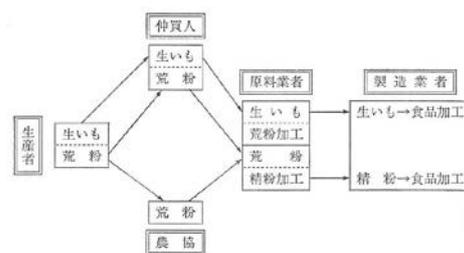
## ②地場産業の興隆

産業構造の変化が進む中、太子町では山間傾斜地の自然条件を生かした特有の農産物がいくつか栽培されていますが、その農産物を原料として食料品に加工する製造業は、当町の工業分野において重要な柱として位置づけられています。原料を地元から調達し、さらに地元の資本と労働力を用いて商品を生産する、地場産業の代表格にあたるのが蒟蒻製造業です。

蒟蒻の製造は長い歴史をもち、農村工業として太子町の農業と工業を支えてきました。



初冬の荒粉作り



流通経路のあらまし

## ③農林業と結びついた商業

山あいの町といった自然条件の下で、太子町は周辺の町村との係わりを保ちながら物資の流通の中心地として機能を果たし、閉鎖的とも言える独自の商業圏を形成していました。その理由は、顧客の大半は農林業従事者であり、固定客でした。そのため太子町の商業は、第1次産業としての農村経済と最も密接な関係により成り立っており、農家経済の好不調と商業の消長は強く結びついていました。

一般的に地域の購買力は人口の動きによって左右されますが、太子町の場合、肝心の人口が減少の一途をたどっていることから、当町の商業は次第に地盤を沈下させる形で推移していきました。

#### ④魅力ある観光地の建設

昭和 30 年，新生大子町が誕生すると、「農業と観光」を二本の柱として町の政策を進めていました。そして観光の面では，日本三名瀑の 1 つに数えられる「袋田の滝」を筆頭に，茨城県では温泉が数少ないため「袋田温泉」や「湯沢温泉」が大きな観光資源となっていました。そして新大子町の観光の目玉として，新たに温泉を開発して「湯の町大子」の条件を整えるべく，本格的な温泉開発に取り組むことになりました。

そして掘削に成功し，待望の「大子温泉」が誕生しました。さらに温泉の湧出に成功した町は，市街地の各旅館や病院などで，温泉利用の需要が明るい見通しとなったので，配湯工事に着手することになりました。

このようにして，昭和 36 年に始められた大子温泉の開発が成功したことにより，既設の袋田温泉や湯沢温泉と合わせて「奥久慈大子温泉郷」が形成されました。そして日本の経済成長も伴い都市部からの行楽客が激増するようになり，「湯の町大子」としての将来が大いに期待されました。

	入湯人員		入湯税額		前年との比較	35年との比較	摘 要
	人	円	円	%			
昭和35年度	41,295	825,000		100	%		袋田・湯沢温泉
36年度	39,302	786,040	95.2	95.2			#
37年度	53,085	1,061,700	135.0	128.6			#
38年度	91,127	1,822,540	171.6	220.9			大子温泉配湯開始
39年度	102,068	2,041,360	112.0	247.4			
40年度	120,503	2,410,060	118.0	292.1			
41年度	142,653	2,853,060	118.3	345.8			
42年度	145,652	2,913,040	102.1	353.0			
43年度	174,919	3,498,280	120.0	424.0			
44年度	170,011	3,400,220	97.1	412.1			
45年度	189,509	3,790,180	111.4	459.4			
46年度	172,940	6,609,640	174.3	801.1			

温泉利用客数及び入湯税額の推移

#### ⑤過疎対策とまちづくり

昭和 45 年制定の「過疎地域対策緊急措置法」に基づいて，過疎に指定された各自治体は様々な過疎対策事業を実施しました。その結果，公共施設の整備や生活環境の改善の面で一応の成果をあげ，人口減少の程度も鈍化し始めました。

大子町では昭和 54 年に，土地利用計画と過疎地域振興計画策定の資料とするため，町内全世帯を対象に住民アンケート調査を実施しました。その結果，まちづくりの基礎となる産業振興を進める際に，農林業，商業，工業，観光のうちいずれか個別の産業が中心となるような発展を図るのではなく，調和のとれた発展を遂げているような将来像を描いていることが読み取れます。こうした住民の意向を踏まえて，これからのまちづくりの指針が決められて行くこととなります。

	人
農商工を調和させた町	1,505 (30.5)
農林業・観光を調和させた町	1,173 (23.8)
工業を中心とした町	544 (11.0)
現在のままでよい	502 (10.2)
農林業を中心とした町	499 (10.1)
観光を中心とした町	422 (8.6)
商業を中心とした町	66 (1.3)
その他	56 (1.2)
無回答	161 (3.3)

町の将来像に関する住民の意向